

踏切装置 譲渡に感謝

由利本荘市の鳥海山ろく線（羽後本荘―矢島間23キロ）を運行する第三セクター・由利高原鉄道（菅場道夫社長）が、秋田市の2社から、秋田臨海鉄道の廃線で不要になった遮断機など踏切保安装置を無償で譲り受けた。今後、踏切で故障が発生した際に活用する。装置は高価なため、長引く赤字で設備投資が難しい由利鉄にとっては大助かりのようだ。

由利高原鉄道

譲渡したのは、いずれも秋田市向浜の工業団地に工場がある医薬品原薬製造「アルフレッサファインケミカル」（大島中庸社長）と、木質バイオマス発電の「ユナイテッドリニューアブルエナジー」（平野久貴社長）。両社とも、敷地出入り口付近にある秋田臨海鉄道の踏切保安装置を自社で管理、保有していた。

利森林組合との取引があり、由利本荘市出身の社員が在籍していることなどから「地域貢献できればうれしい。ぜひ協力したい」と要請に応じた。

譲渡されたのは、遮断機と警報機など2セット。どちらも設置から数年しか経過していない「現役」で、新品を購入すると1セット300万〜400万円するといふ。

今年3月末の秋田臨海鉄道廃線を受けて、由利鉄が7月、不要になった装置の譲渡を要請。アルフレッサ社は、先に他県の鉄道会社から同様の要望を受けていたが、「地元で再利用してもらいたい」と由利鉄への譲渡を決めた。

由利鉄の鳥海山ろく線は1985年、旧国鉄矢島線を引き継いで開業した。近年は乗客減少で赤字が膨らみ、設備の更新が思うように進んでいなかった。旧国鉄時代に整備され、著しく老朽化した踏切が数カ所あり、いずれは今回譲渡され

臨海鉄道廃線で不要に

秋田市の2社、無償で



譲渡された警報機や遮断機を撤去し、搬出する由利高原鉄道の社員＝秋田市向浜

た保安装置で代替するといふ。

由利鉄は今日5日、2社の工場近くの踏切で遮断機などを撤去。保線を担当する矢島駅の工務所にトラッ

クで搬入した。作業に当たった渡部悟工務所所長(63)は「これまで踏切保安装置に予備がなく、故障してもすぐに直せない恐れがあった。譲ってもらった装置はまだ新しく、十分に再利用できる。ご厚意に感謝している」と話した。

(遠藤卓之)